



「防長名蹟」(写真資料・行幸啓4)

アツメル・シルス ④

## 明治山口県の映し鏡 「献上品」の世界

### 《近代山口県と行幸啓》

天皇の外出を行幸、皇后・皇太后・皇太子・皇太子妃の外出を行啓と呼びます。山口県では、明治5年(1872)と明治18年に明治天皇の行幸、明治41年に東宮(後の大正天皇)、大正11年(1922)に貞明皇后行啓、大正14年に東宮(後の昭和天皇)の行啓がありました。

さらに、明治44年11月、陸軍大演習視察のための九州下向途次、明治天皇の三田尻御駐輦(宿泊)もありました。

行幸啓に際しては、厳重な警備の一方で、何かしらの感慨を胸に抱いたひとびとによって世間全体が奉迎ムードに包まれます。明治末年の二度にわたる奉迎にあたっての献上品や台覧品は、はからずも明治期の山口県の姿をあらわす記録や情報の集大成となったのです。

### 《行幸啓にまつわる記録》

文字(手書・活字)、数値、図解、地図、写真など、行幸啓時の近代の県域の姿はさまざまな手段によって記録されてい

ます。その多種多様な世界には豊かな情報が詰め込まれています。印刷技術の進歩とも連動しますが、写真や地図、そして色刷りの記録が記憶をたぐりよせるタイムスリップの愉しみを増幅させてくれるのです。

### 《明治41年の献上品》

明治期の山口県の表情は、「県治一覧表」「県治一斑」「県治提要」「県治概況」などさまざまな名称の県の刊行物で垣間見ることができます。「県治提要」は明治18年7月作成、つまり明治天皇行幸時に呈上されたものです。「県治概況」は明治32年の内務大臣西郷従道の視察にあわせて作成されたものです。その後作成された「勸業年報」「学事年報」「警察年報」からも県の姿を捉えることが可能です。このような各種の記録の集大成が明治41年東宮行啓時に呈上された「県勢要覧」です。

外向きに伝えるべき県の姿として、風土や人口以外に、明治前半期作成のものには、治水事業・交通網整備などの報告に



「山口県大観」  
(一般郷土史料B8)

大正の行啓に際しても、それぞれ『記念写真帖』が作成献上されています。

東宮行啓の写真帖は一般配布用の簡略版が数種類作成されています。それまでのものと大きな違いは、各所をめぐる東宮の姿が撮されていることです。

写真は東宮行啓の翌年に行啓記念に作成された「山口県大観」。鳥瞰図絵師吉田初三郎のライバル金子常光の鳥瞰図をあしらった県勢要覧です。

力点がおかれ、明治後半期のものでは産業統計が重視されていく傾向がみられます。つまり、県の実情を描き出す場合に、はじめは領域的な把握に重きがおかれ、のちには生産力が重視されていく傾向があったのではないかと考えられます。

明治の東宮行啓時には「山口県勢要覧」のほかに「明治三十七八年戦時並戦後経営一斑」「防長名蹟」が作成されました。

前者には、国債募集や出征軍人数など日露戦争への対応を直接的に示す数値と、日露戦後経営で重視された軍人救護に関する数値が掲載されています。とくに「廃兵並軍人遺族就業実況」の項目には、その窮状を伝える写真が数多く掲載されています。日露戦後の閉塞感のにじみ出た記録です。

一方、「防長名蹟」には、県内の名所旧蹟に加えて、小野田セメント・義済堂・海軍煉炭製造所など県内の近代工業を象徴する施設の写真が掲載されており、歴史や由緒とあわせて伸長する県勢の様子が強調されています。見開きで左側に写真、右側に説明、という構成です。山口町の写真師麻生雲烟撮影の写真がコロタイプ印刷で製版されており、明治末年の山口県のさまざまな姿が凝縮されています。

また、東宮行啓記念として、明治41年7月に「山口県案内」が防長新聞社から刊行されています。初代山口県教育博物館長作間久吉の叙述により、県内の地理歴史風土が紹介されているほか、「交通」「官公衙」「団体」「教育」「銀行」「会社」「衛生」などについても便覧的に列記されています。少量ながらも写真も掲載されているほか、色刷りの広告も加えられており、当時の実業会の興隆の様子も概観できます。

### 《明治44年の献上品》

明治44年の、明治天皇三田尻御駐轡を契機に献上されたのが「防長名蹟」「県勢要覧」「山口県地図」「防長志要」です。前二者は明治41年の東宮行啓時の献上品を基調として、統計データ等を時点修正して、装丁を豪華に仕立てたものです。表紙は錦でこしらえ、桐箱に収められた献上品は、県に残された発注仕様書によると「高尚優美な最極上製」と記されており、京都や東京の書肆業者がその作製を請け負っています。独特な優美な風合いの仕上げには高い技術が必要であったということなのでしょう。二部作製され、一部は皇室に献納、一部は県に保管されたのです。

明治末年の行幸啓という一大イベントにあわせて用意されたさまざまな記録は、明治の社会の諸相を集積した「映し鏡」と考えることができます。

- 写真右上・右中(写真資料・行幸啓1)
- 写真右下(写真資料・行幸啓3)

